

ASD 児に対するインフォーマルアセスメントのあり方

R4.6.18

◇ASD における診断と評価

- ・ ASD 児が能力を発揮するには個別的なアプローチが有効。一人ひとりの子どもの特異的な学習スタイルを見極めるアセスメントが必要。

◇アセスメント

- ・ アセスメントで分かった本人の能力のバラつきにアプローチし、定期的なアセスメントと結果に応じた実践を繰り返す。
- ・ 支援者として、当事者が「わかる・できる」ように支援できているか？不適切な行動の引き金になっていないか？

◇インフォーマルアセスメント

- ・ 不適応行動の背景には障害の特性や経験・誤学習などがあり、それは支援者の対応を含む環境の中で起こる。周囲からは不適応と見える行動には、「強化子の獲得」や「苦手な事の回避」など、本人にとってメリットとなる周囲の人の反応がある。

◇子どもの行動観察のポイント（観察に適した場の設定）

- ①表情・身だしなみ・・・被虐待、服のこだわりや表情の乏しさなど ASD の特性かも。
- ②姿勢・落ち着き・集中力・・・行動調整の未熟さは ADHD、ASD、知的障害にみられる。
- ③会話・人との関わり方・非言語コミュニケーション・・・ASD の特性、被虐待かも。
- ④感覚の特性・・・気温、集団の中、偏食、触られることへの抵抗など ASD 児に多い。
- ⑤感情調整・・・カッとしたりやすい、パニックなど、ADHD、ASD でよくみられる。
- ⑥不器用さ・・・手先の不器用さ、運動のぎこちなさは発達性協調運動障害にみられる。

◇情報収集

- ・ 本人の困りごとと背景にある問題を明らかにし、支援者同士が共通理解して支援を進める。
- ・ 準備：分かってもらえるのか、という不安が前提。安心して話せる環境調整が重要。
- ・ 非言語情報から読み取る・・・服装、表情、話し方、行動などの原因を考える。
- ・ 関係性づくり・・・「ちゃんと話せた」「今後も相談できる」と感じてもらうように。
- ・ 保護者からの聞き取り・・・主訴、相談歴、成育歴、保護者から見た子どもの様子など
- ・ 観察（学校場面含む）・・・準備、姿勢、板書、指示理解、集中、遊び、友だち、机、ロッカーなど
- ・ 支援関係者からの聞き取り・・・気になること、学習のこと、休み時間のこと、支援してほしいこと
- ・ 不適応に気づくポイント・・・成績、言動の変化、身体症状、作文や絵などの表現物など

◇発達アセスメント（一人ひとり違うことを理解する）

- ・ 発達段階（節目）何歳程度の発達か・・・運動、姿勢、対人関係、言語、感覚など
- ・ 特性（発達のつまづき）・・・注意、理解、興味の対象、表現、感じ方、見え方、聞こえ方、記憶
- ・ 背景を理解する・・・理由は何か、行動によって得られるものは何か、特性の影響。

◇支援者として

- ・ 根拠に基づいた説明を行い、関係者全員が共通理解できるように。